# ぞうきんと三笠宮

# ぞうきんと三笠宮

芹沢 雅子 著

原書房■100冊選書 38

印
検　止
廃

©1967

〔著者紹介〕

明治四四年高知市に生る。海軍軍人の父赴任に伴い諸地転住、大正十三年より十年間上海在住、同地日本高女四年修了、高知県立第一高女卒、上海パブリックスクール中退して三井物産社員に嫁す。昭和十六年夫に死別、その前後より雑文を書き生活の資となすかたわら諸種職業に携わる。

《装幀・出竹弘司》

△原書房・一〇〇冊選書38▽

ぞうきんと三笠宮

定価　四三〇円

昭和42年10月1日　印刷
昭和42年10月10日　発行

著者　芹沢雅子
発行者　成瀬恭
印刷所　島田精版印刷株式会社
製本所　佐抜製本所
発行所　株式会社　原書房
東京都新宿区花園町一〇六
振替東京　一五一五九四
電話（三五四）〇六八五代表

乱丁，落丁はおとりかえいたします。

# 目次

国破れて山河むなし……一
地を這う人々……一三
応援三勇士……四三
ボロ屋誕生……五一
ブクロの金貸し……六一
不逞のやから……六九
わが使徒行伝……八四
千客万来……一〇四

三笠宮にぞうきんを……二六
小屋の春秋……二五
京へ遠征……二八
仏都悲歌……二九
京の夢・丸太町教会……三〇
東海道ボロ行……三七
京の人模様……三六
ぼた山にボロ拾い……三三
天皇陛下聞き給え……三九
あとがき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 国破れて山河むなし

前の年（昭和十九年）もそうだったが、その年（昭和二十年）の夏も、暑い暑い、からからに乾いた長い夏だった。お陽さまは翳るのを忘れてしまったように照りつづけ、眩しい入道雲はその頃の私たち日本人の希望も未来も閉ざしてしまうかのように、そびえたっていた。丁度、太平洋戦争も末期の頃である。

二月、米軍、マニラに突入。同時に、米機動部隊、日本に初来襲。

三月、米空軍機、東京を大空襲。

四月、米軍、沖縄に上陸。

五月、米B29機、再び東京を大空襲。以後日本の大都市は軒なみに被災。

暗い報道ばかりが続いた。

戦局は日ごとに悪化し、心ある日本人なら不吉な予感さえおぼえるような嫌な季節だった。

けれど、そんな中で、富士山は全く戦争も知らぬげに、その平和な豊麗な姿をみせ、空はあくま

でも蒼く、樹々もまたあくまでも緑の色を深めていた。

その日、富士山麓の一隅、ここ御殿場の村では、私たち女ばかりの《小母さん部隊》が、今日もまた本土防衛最後の砦として、悲愴なる軍事演習の訓練に余念がなかった。竹槍を肩にオイチニ、オイチニと汗みどろの行進、その連続である。みんな一応真剣だった。もちろん私もはじめはそうだった。汗まみれの顔を真赤にして精一ぱい頑張っていた。部隊編成は、赤ん坊をおぶった嫁さんから腰の曲った老婆まで、村内各戸から狩り出された五十余名である。出ないと憲兵がくるというので、みんな渋々出てはいるものの、八月の炎天下に乞食の火事装束よろしく、それぞれ異様な防空服に身をかためているので、まるで炎熱の火事場の渦中にいるようだった。すでに気息はエンエン、焼けた火山灰地に足をとられ、草いきれに蒸しあげられて、殆んどが倒れる一歩手前であった。

その中で、私の膝頭がどうしても直角に上らないらしい。二等兵上りの教官殿はその度にいやというほど私の膝を叩くので、私は次第に癪にさわってきた。

はじめからこんなしおたれた人々に、こんな無意味な訓練を強いるバカバカしさに、私は滅茶苦茶に喚きだしたいところだったので、私の膝頭はおせじにも上ろうとはしないのだ。

「お前はジェンジェン（全然）魂がこもっとらんぞッ！　そんなことで、この神州日本が守れると思うとるのかッ！」

「……」

私は阿呆らしくて、返事もしなかった。

「敵はもはや目前に迫っとるんだぞッ？　そんな覚悟でどうなるかッ……」

教官殿はすっかり自分の訓戒に陶酔しているらしく、声が悲壮感でまるで上ずっていた。彼は私がよそ者で村の生意気後家だというので、日頃から嫌っていたのだ。

どえらいものが広島に落されて、何万もの犠牲者が出、天皇が泣かれたという噂が聞かれた日のことである。

私は教官殿の再々の注意にもかかわらず、どうしても膝が直角に上らず、とうとう列外につまみだされて手足をばたつかせているとき何処からか、わめき声がきこえてきた。

「重大放送があるとヨウ！　○○さんとこのラジオに集れエッ！」

たちまち、≪小母さん部隊≫にざわめきが起った。こうなると弱い。女である。脆くも隊伍は崩れ、教官殿の制止もきかばこそ、烏合の衆に早変りだ。私もすわとばかり摑まれた手をふりほどいて駈けだした。

「こらッ！　待てッ！　流言じゃア！　列を離れる奴は厳罰じゃぞうッ！」

追いかける大音声も何のその、私につづいて≪小母さん部隊≫は総崩れになった。

聞えてくるのはしみいるような蟬の声と、聞きとりにくい初めてきく天皇の声――≪小母さん部隊≫は全員○○さんのラジオの前で耳を澄ました。

ともかく、天地開闢以来の玉音放送である。私たちはおそれかしこみ、畳にひれ伏すようにして聞いた。その天皇のお声は、いと悲しげに戦争の終ったことを告げていた。

「朕は汝らのため耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んで、敵の軍門に降るのである……云々」

玉音の正しい意味はともかくも戦争は終ったのだ。竹槍を捨てていいのだ。長く辛い忍従の日々は去ったのだ。けれど、何のために今まで耐え忍んできたのか?! 懸命に頑張ってきたのか?! この敗戦の日を迎えるためにか……いやいや、そうではなかった……ただひたすら勝利の日を信じ、こらえこらえてその日の来るのを待っていたのではなかったか。

人々は複雑な想いと悲しみに声をあげて、オイオイ泣いた。

けれど、いつまでものんびりと泣いてはいられなかった。今度は、《鬼畜》と教えこまれた敵米英の将兵どもが、戦勝兵士としてこの国土に町に村に進駐してくるというのだ。相手は獣（?）なのだから、何をされるか分ったものではない。何せ、こちらは敗戦国民なのだから、手出しはおろか、抵抗することもできまい。相当の覚悟が必要だろうとの話になった。早速、村の長老たちの提案で、準備するにこしたことはないということになり、女子供は隠れる場所を急いで造らされた。みんな気が転倒しているからか、うまい隠れ場所はなか〳〵できない。戦々兢々やっとどうやらこねあげた時、火の見やぐらの鐘が鳴った。

ついにその日が来たのだ。《鬼畜》米英が、完全武装でこの村に立ち現われたのだ。戦時中、作

られた隣組は、まだその頃、配給制度ということもあり惰性として存続していたが、その隣組の組長が、これも戦争中の延長であるメガホンを口に《鬼畜》の出現をフレ廻った。女子供はいっせいに、にわか造りの納屋や天井に隠れた。

私は咄嗟にもぐる所がなかったので、とりあえず押入れに頭だけ突っこんで、息をひそめていると、ふいに、

「芹沢さん、出てくれやァ！　アメリカが何か言うとるで……」

と興奮にひきつった声が呼んだ。私は仕方なく、恐る恐る押入れから頭を出して外を覗くと、大きな毛むくじゃらのアメリカ兵が鉄砲を肩に四人ほど立っている。瞬間、息もとまらんばかりになったが、よくみると、みんな若くてあどけない顔をしている。眼は青いが、血走ってもいず、平和な眼差しだ。私は、やっと胸をなでおろした。

彼らは指で輪を造ったり、地面に丸をかいたりして、しきりに村人に訴えている。村人は分らないまま、ますます脅迫でもされているような錯覚と恐怖に襲われている様子だ。それで、思わず藁にでもすがるつもりで、物識り（ほんとうはそうではないのだが）と思われていた私を呼んだものらしい。

彼らはなおも身ぶり手ぶりよろしく、さかんに訴えている。彼らが、その丸いものを切ったり食べたりする動作で、私にはそれが《玉ねぎ》だとすぐ分った。しかし、気も動顛している村人たち

には、チンプン・カンプンらしい。見ていて、私はもう笑いださずにはいられなかった。
「……玉ねぎですよ。玉ねぎを出せと言ってるんですよ」
「何？　玉ねぎじゃと？」
人々は唖然とし、それからやっと笑った。
「何じゃ、玉ねぎのことかいな……そんなら、お安い御用じゃ……」
人々は大きく頷き、すぐに散っていった。
《鬼畜》の筈の兵士たちは、忽ち玉ねぎと人に取り巻かれた。玉ねぎぐらいなら、この御殿場の村には何んぼでもあった。兵士たちはそのお礼に、持参した缶詰を沢山置いていった。この兵士たちはどうやら《鬼畜》ではなかったらしい。だが、まだまだ油断はならない——と私達は警戒を解かなかった。
それから村人たちはアメリカ兵を見ると、玉ねぎを持ち出して愛想笑いをするようになった。元来、保守的で狡猾（こうかつ）な農民たちは、その先祖代々の《微笑》が大へん板についていた。この迎合的な風潮は、一夜にして、この村を覆ったようだった。いい悪いではなかった。敗戦国民の正直なみじめな姿であった。
また当時、御殿場の東山に、アメリカ婦人を妻君にしているN氏が住んでいたが、彼はそんな中でたちまち引っぱり凧となってしまった。猫も杓子（しゃくし）も《民主主義》の世の中とはなり、いまや《民



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

主主義》でなくては夜も日も暮れない始末だったから、恰好の文化人として、N氏は連日デモクラシーの講演に走りまわらねばならなかった。N氏は私の父の友人であり、引っぱり出したのは私であったが、その得意そうな顔は、あまり見っともいい図ではなかった。彼は戦時中、スパイ扱いされて、憲兵の監視下に一歩も外へ出ることができなかっただけに、同情の余地はあったが、少しいい気になりすぎたようだ。彼はいつのまにか、村から町へ、町から都会へと、引っぱりだされてゆき、私が最後に会った時には、お濠端の第一生命ビル、かの有名なマッカーサー司令部の一室にそっくり返っていた。

「下は汲み取から上は天皇のことまで、すべて私を通じるんですからねえ!……」

というのが、彼の得意の弁だった。それほど、その頃は英語の話せる者が払底していたのだ。そのあげく、横浜の監獄から英語の話せる与太者たちが狩り出されて通訳にあたるという。とても信じられないことであった。

そういう訳で、村一番・町一番の通訳であり文化人であったN氏が上京してしまうと、村には私だけしかアメリカと話せる者がいないということになり、私はめっぽう忙しくなった。何しろ、玉ねぎしか分らなくても、人々は私をエライもんだ! というのだから、もう何をか言わんやである。私は仕方なく、言われるままに道路直し、給水作業、野菜の供出と、どこにでもとんで出た。ブロークン・イングリッシュだろうが何だろうが、村人たちにとって、私はいまや欠かせない《英語の

話せる小母さん≫≪陽気な未亡人(メリー・ウィドー)≫だったのである。

そんな或る日、村会議員のA氏がやってきて、あんたの所は旧家だし広いから簡易ホテルをやったらどうか、とすすめてくれた。どえらく儲かるばかりでなく、村にも仰山金が落ちるでな、というのが理由だったが、戦争に敗けてそんなうまい話のあろう筈がない。私は眉唾ものと本気にしなかったが、どう伝え聞いたのか、それから間もなく、ほんとうに三組の毛色の異る男女が泊めてくれと現われた。むろん、女の方は日本のまだうら若き、ついこの間までモンペ姿も凛々しい≪大和撫子(やまとなでしこ)≫たちだった。彼女らは唇の紅もあざやかに、大きな異人たちの腕にぶらさがっている。私は彼女らの変身の見事さに内心舌を巻きながら、

「とても三組なんて泊れませんよ」

とだんこ断った。

ところが、旧≪大和撫子≫嬢は、

「お部屋は一つあればいいのよ」

と、さも権威ありげに言い放って、テコでも動かない素振りなので、私もついに諦めて十畳の客間を彼ら彼女らに提供することにした。少しあきらめが早すぎたようだ。

彼らは部屋に入るや否や、忽ち矢の催促ときた。

「お母さん、毛布ないの？」

「お木くれない？」

「足がでるからざぶとんつなげてよ」

等々、さんざんこき使われて、私は席のあたたまる暇もない。こんな筈ではなかったと思ってみてもどうにもならない。疲れはててそろそろ休もうと思っていると、今度はキャーキャー、クックックえらいさわぎが始まった。雑魚寝もいい所である。私はもはや、休むどころではない。一つ部屋だし、電気もついているんだし、よもやと思っていたのに、そのよもやが、この私にとっては世にも奇怪な男女入り乱れての乱痴気騒ぎが、夜もすがらつづけられて、おかげで私は一睡もできない有様。まるで一晩棒立ちの刑にあったみたいにフラフラになった。

そして、翌朝十一時にやっとバイバイということになった。私がどれほどホッとしたか、想像してもらいたい。

「お母さん！　お母さん、サンキュー……また、時々頼むわね！」

私は自分の耳をうたぐった。まるで芸者屋の女将みたいに思ってる。二度と入れてやるものか！

彼女らはしかし天真爛漫、言うだけ言うと、さっさと異国の男たちにぶらさがって出て行った。外にはジープが二台とめてあり、それに分乗して風の如くに走り去った。

三組の異様な男女はそれこそ上機嫌で、畳一畳敷き程も缶詰を置いていったので、早くもそれを眼ざとくみつけた村人たちが、あッという間に駈けつけてきて、またひと騒ぎ……中身もわからな

い缶詰の取りっこで、けんかさわぎになった。私はホト〳〵呆れてしまった。

何だかもう、何もかも嫌になって、足柄山か金時山にでも庵でも結びたくなっていると、今度は箱根の山から坊さんがあわてて駈け降りてきた。

私の家を旧家と見込んでのお願いだというから何だと思ったら、書画骨董の類を売ってくれと言う。アメリカさんが高く買うのだそうだ。

「何ね、解りゃしないんだから何だってかまやしないんですよ。日本テキ（的）でありさえすれば、奴らは手もなく喜ぶんだから……高く売って上げますよ」

いよいよもって、わが愛する祖国ニッポンは滅び去ったとの感を深くした。仏に仕えるべき坊主までがこの為態なのだから。

この平和で豊麗で、汚れなき美しさに今日もそそりたつ霊峰富士を仰ぐにつけ、この山麓の村が日ましにうとましくなってきた。

ここは私の故郷でも馴染みの土地でもない。父も夫も弟も、大事な人たちはみんな死んでしまい、亡夫が四百年も続いた旧家の跡取りであったために、わざわざここに私が疎開してきて住みついているにすぎない。封建性も閉鎖性も依然として厳然たるこの村、この土地。しかも、この国の将来を背負うべき若い有為の人材は殆んど死んでしまい、後に残された者どもがこんな有様で私利私欲に狂奔しているとあってはこの国の未来は知れたこと、私はますますアホらしくなり、何もかもが

むなしくなってきた。

しかし、あの困苦欠乏、未曽有の艱難の戦時下をやっとのことで生き残ってきたことを思うと、仇おろそかに朽ち果てることはできぬ。このまま無為に終ってしまうのは何といっても業腹だった。私の好きなヴァレリーの詩の一節ではないが、《風立ちぬ、いざ生きめやも》だ。

ここは一つ、おそまきながら全身で生き甲斐の一つもみつけてみよう。それでなくては、何でこの世に生を享けたかわらない。少しは人の役にもたち、この世にサヨナラ告げる時、生き甲斐あったとうなづけるのでなかったら生き残った身の意味はない。

私が柄にもなく真剣にそう考えたのも、あながち三十五歳の未亡人という、身軽さ、空しさからだけではなかった。最愛の夫の遺志もそこにあると直感したからだった。私は思わず武者ぶるいした。

そして父祖伝来の品を、すっかりこの生臭坊主に手渡して売却してもらう決意をした。その金が、私の第二の人生のスプリング・ボードになる筈だ。私は勇躍した。亡夫も御先祖も、私のこの処置をご照覧あれ！　必ずや、われ為すあらん！

坊主はキリキリ舞いしながら、箱根と御殿場の間を往復し、漸くのことで、三万なにがしかの金を私に持ってきてくれた。

私はその金をふところに、大きなリュック一つを背負って、足の踏み場もない超満員の汽車にぶ

ら下りながら、一路東京へと向った。時に、昭和二十二年、春のことであった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com